



「利他の精神で子どもが高め合い、地域と共にある学校」

～ 一人ひとりの Well-being (幸せ) の実現を目指して ～

常盤北小だより

令和8年5月29日

第3号

さいたま市立常盤北小学校

ともだち

校長 中田 清人

私の前を走るよっちゃんの姿が、一瞬見えなくなった。田んぼのあぜ道に足を取られ、もんどり打って転倒したのだった。その刹那、私はあろうことか大笑いしてしまった。

立ち上がったよっちゃんの両膝は泥と血で汚れており、その顔は怒りで歪んでいた。「なんで、人がケガしているのに笑うんだ！」

いつもは優しいよっちゃんが、こんなにも怒りをぶつけてくることはそれまでなかったことだった。私は、自分がしたことが取り返しのつかないことだと気づき、後悔の気持ちが襲ってきた。40年以上たった今でも、よっちゃんの声は私の脳裏にこだましている。あの後、私は彼に謝ったのだろうか。思い出せない。

中学に上がると、よっちゃんは目覚ましい活躍を重ねていった。陸上の競技会では新記録を次々に樹立していったし、足の速さで勝てる者は2年や3年の先輩にもいなかった。私たち仲間は、彼の活躍をまるで自分のことのように喜んだ。彼は、同学年の私たちのヒーローだった。それだけに、とても目立つ存在だった。

私とよっちゃんは、クラスも部活も違っていたが、毎朝一緒に登校していた。私が、朝、自転車で彼の家の前まで行くと、しばらくしてよっちゃんが現れる。登校中は、二言三言会話をするだけで、他には特に話をすることもなかった。仲が悪かったのではない。ただ、一緒にいることが当たり前だったのだ。

しばらくして、朝、よっちゃんが家から出てこないことが続いた。よっちゃんの母親が、先に行くように私に告げる。私は、「部活で疲れているのかな」くらいにしか考えてなかった。

風の噂に、よっちゃんが上級生から「イヤガラセ」を受けているという話を聞いた。よっちゃんからは、一言もそんな話は聞いたことがなかった。「まさか、あのよっちゃんが、そんなことされるわけがない」と思い込んでいた私は、相変わらず朝の訪問を続けていた。

ある時、私は担任の先生から個別に呼ばれて、「〇〇（よっちゃんの名前）の家に毎朝行っているのか？これからお願いしていいか？」と言われた。それを聞いたとき、噂は本当だったんだと思った。

そんな折、私もクラスの同級生から「イヤガラセ」を受けるようになった。特に目立つことのない私への風当たりが強くなる理由はあまり思い当たらなかったが、逆にそれが理由なのかもしれない。「学校に行きたくない」ということも多かったが、朝起きてみると、特に熱があるわけでも具合が悪いわけでもない。何よりよっちゃんが待っているかもしれない。結論として学校は休めない。

その朝、私がよっちゃんの家を訪れると、よっちゃんが現れた。私は何も聞かなかった。よっちゃんも何も言わなかった。いつも通りの朝だった。

私が学校を休まずにいられたのはよっちゃんのおかげじゃないかと思う。もしかしたら、よっちゃんにとっても、私の存在がそうだったのかもしれない。

19歳になったとき、故郷の駅でバッタリとよっちゃんに会った。中学卒業後は、なんとなく疎遠になってしまっていたよっちゃんは、工務店で大工をしているのだという。「将来は、母親に新築の家を建てるんだ」と、笑顔で夢を語っていた。そんなよっちゃんは、私よりも随分と大人に見えた。彼はいつも私の前を走っていた。

6月は、「いじめ防止強化月間」です。